

初期同志社における社会科学教育結実の一例

—安部磯雄と D. W. ラーネッド—

神 田 朋 美

本稿は、キリスト教主義教育を掲げる同志社において、創立当初から学際的教育がおこなわれてきたことの特異性や、学生に与えた影響について明らかにすることを目的とする。その中でも特に、明治期のキリスト教界において信仰との並立が困難とされたキリスト教社会主義思想の形成を完遂した安部磯雄と、安部の思想形成に多大な影響を与えたと考えられる D. W. ラーネッドを例に、神学教育と社会科学教育の並行がもたらした影響を取り上げる。

まず、キリスト教社会主義を念頭に、第2節で安部とラーネッドについて概観し、第3節では、安部が起草した「社会民主党宣言書」から安部の社会主義思想の概要を把握し、その思想とラーネッドの講義内容との関連性について比較考察をおこなう。そして第4節において、安部をキリスト教社会主義者と評する所以とされる聖書箇所について、ラーネッドの神学講義から派生した新約聖書注釈を考察することにより、ラーネッドの神学教育の特異性と、社会科学教育との関連を詳らかにする。

以上の考察から、牧師養成を目的とするミッションスクールではなく、神学にとどまらない、社会科学や自然科学も含めたキリスト教主義教育を行った同志社であったからこそ、多角的で柔軟な視野や思想形成の可能性が高まり、キリスト教の博愛主義を基盤とした社会の改良や改革を模索する人物を数多く輩出したものと考えられる。

1 はじめに

本稿は、キリスト教主義教育を掲げる同志社において、創立当初から、神学だけでなく、社会科学・自然科学分野の教育が並行しておこなわれてきたことの特異性や、学生に与えた影響について明らかにすることを目的とする。その中でも特に、明治期のキリスト教界において信仰との並立が困難とされたキリスト教社会主義思想の形成を完遂した安部磯雄と、安部の思想形成に多大な影響を与えたと考えられる D. W. ラーネッドを例に、初期同志社における神学教育と社会科学教育の並行がもたらした影響を取り上げる。

キリスト教社会主義者となった安部の言論の中に、ラーネッドから学んだ神学と社会

科学両方の教育がどのような形で現れているかを考察することにより、初期同志社の教育の特異性が明らかになるものと考ええる。その為、考察の柱として、第3節において、安部が起草した、日本初の社会主義政党である社会民主党結成時（1901年5月18日）¹⁾に示された「社会民主党宣言書」²⁾を用い、安部の社会主義思想の概要把握と、その思想とラーネットの講義内容との関連性について考察をおこなう。これにより、社会科学教育の影響を示せるものと考ええる。次に、第4節において、安部をキリスト教社会主義者と評する所以と考えられる「コリントの信徒への手紙2」6章10節と「フィリピの信徒への手紙」4章12節について、安部に新約聖書を講義したラーネットの注釈を考察することによって、同志社の聖書解釈講義の特異性を示すとともに、神学教育と社会科学教育とが同志社の中でどの様につながっていたかについて明らかにする。これにより、学際的教育が初期同志社で果たした役割の一端を詳らかにできるものと考ええる。また、本稿は、同志社大学人文科学研究所第1部門研究で行なわれている「住谷悦治日記に関する総合的研究」を発端としており、住谷が40年以上の歳月をかけて完成させた『ラーネット博士伝—人と思想』³⁾の成果にも依りながら考察をおこなうものである。

2 安部磯雄と D. W. ラーネット

本稿における同志社のキリスト教社会主義とは、キリスト教の博愛に基づいた社会活動や思想と定義することが出来る⁴⁾。このような思想や活動に携わった者の多くは、感化を受けた人物として創立者・新島襄と共にラーネットの名前を挙げる。安部もまた、その一人である。このような同志社関係者の中で安部が特異であるのは、社会問題の抜本的解決を目指し、政治の世界においてキリスト教社会主義の形成と実践を試みた点にある。「デモクラシーも社会主義も基督教が其根底となつてゐなければならぬ。社会主義から基督教を引き去れば共産主義が残」と語った安部を⁵⁾、キリスト教と社会主義の両方を冠した「キリスト教社会主義」という思想を念頭に置きながら概観すれば、そのどちらもが思想形成過程に立ち現れていることが明らかである。また、ラーネットがおこなった経済学講義の日本における新規性と、学生ひとりひとりの中で神学と社会科学の融合を後押しする素地の存在も明らかである。

2.1 安部磯雄

「社会民主党宣言書」を起草したのは、日本社会主義の父と評される安部磯雄（1865-

1958年)である。安部は1879年から1884年まで同志社に学び、1882年、新島襄(1843-1890年)から洗礼を受けている。また、1883年、5年次生のとき、D. W. ラーネッド(Dwight Whitney Learned, 1848-1943年)から経済学と政治学を学ぶ。同志社在学中、貧困に苦しむ人々を目の当たりにした安部は、廃藩置県により困窮した実家での経験から、貧困の苦しみを、リアリティを持って受け止めていた。キリスト教による精神的救済だけでなく、物質的幸福による解決とは何かについて思索していた安部は、ラーネッドの経済学および政治学講義を受け、「精神生活は宗教により、物質生活は経済学によりて指導さるべきものである」という考えに至る⁶⁾。このラーネッドの講義内容が、安部の、キリスト教の人類愛に裏打ちされた社会主義思想形成のはじまりであった。安部がいかにキリスト教と経済学の両輪による救済について考え模索していたかは、彼の卒業演説題に端的に表れている。同志社卒業時には「宗教と経済」、ハートフォード神学校卒業の際は“A Christian View of Economics”であった。このふたつの演説について安部は、「宗教と経済」は演説題目から「私が其當時どんな考へを懷いて居たかは大體推測することが出来ると思ふ」と述べ⁷⁾、先に挙げた「精神生活は宗教により、物質生活は経済学によりて指導さるべきものである」という主旨の演説であったと推測される⁸⁾。また、「唯臆氣に宗教と経済との關係を考へて居たに過ぎなかつた」とも述べており⁹⁾、あくまでも思想形成のきっかけや始まりであったことがうかがわれる。同志社卒業から10年後の“A Christian View of Economics”については、「演説の内容は基督教の人類同胞主義を其まゝ、経済組織の原則とすべきことを主張するのであつた」と記しており¹⁰⁾、同志社で得た萌芽を、牧会、教育、そして留学という経験と学びとによって発展させていったことが表れている。このようにしてキリスト教社会主義者となった安部は、「教育の目的に適応するやう社会の環境を改善することの必要」を痛感し、「社会の組織の改造が、あらゆる問題の根本」であるとして政治活動を開始するに至った¹¹⁾。

2.2 D. W. ラーネッド

安部にキリスト教社会主義者としてのきっかけを与えたラーネッドは、1875年11月、アメリカン・ボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions)から“a missionary teacher”として同志社へ派遣された、伝道本部派遣教師であった。創立期の同志社においてラーネッドは、聖書神学、新約聖書、教会史、数学、物理学、天文学、経済学、政治学、体操など数多くの講義を担当した¹²⁾。このうち経済学について

は、1878年から1892年までの15年間にわたり教鞭をとっている。住谷は、日本において「社会主義・共産主義に関する講義を堂々と学校の教壇からした」最初の人物はラーネッドであると分析し、結論付けている¹³⁾。ラーネッドの経済学講義は時代の変遷とともに発展を繰り返し、それぞれの講義内容は、講義が行われるのとはほぼ同時期に、伊勢（横井）時雄、宮川経輝、浮田和民ら教え子の手によって、それぞれ翻訳出版された。また1973年には住谷により、森田久万人が筆記した講義ノートと、講義の最終版と思われるラーネッド直筆英文原稿2点の翻訳および公開がなされている。

同志社においてラーネッドは、「右手に聖書、左手に経済学」の人と称される。これは、ラーネッドの教え子のひとりであり、安部の後輩でもある、社会事業の父・留岡幸助の寄稿文の一節が端緒と目されている。住谷はその典拠として、「今十分ナル改良ヲ得ンニハ正当ナル経済学ト真実ナル博愛主義ニ由ラザルベカラズ、而シテ是等ハ唯真正ナル基督教ニアルノミ」という、社会改良の方策に対するラーネッドの言葉を挙げている¹⁴⁾。この一文は、前小節に挙げた安部の「精神生活は宗教により、物質生活は経済学によりて」と完全に呼応しており¹⁵⁾、安部がキリスト教社会主義に貫かれた政治活動を展開していく種子の一粒は、ラーネッドによって播かれたものであることを示していると言えよう。

3 社会民主党宣言書

本節では、初期同志社の社会科学教育が与えた影響を明らかにするため、安部の起草した「社会民主党宣言書」の理想綱領8項目から、安部の思想概要の把握と、ラーネッドの、キリスト教に基づく社会形成と活動の重要性を柱とした経済学・政治学講義の内容との関連性について考察をおこなう。

安部の在学期間に行われていた講義内容と推測されるものは¹⁶⁾、①宮川経輝訳「紙幣論」（1880年演説）、②宮川経輝訳『経済新論』（1882年翻訳開始）、③森田久万人筆記・住谷悦治訳「経済学・政治学講義」（1885年筆記）の3点である。しかし、①「紙幣論」は『経済新論』中「貨幣論」の章で詳細に講義されていること、③「経済学・政治学講義」は森田の口述筆記自体が安部の卒業後に開始されていることから、②を基として1887年9月に合冊刊行された『経済新論：附・政治学』¹⁷⁾を用いて考察をおこなう¹⁸⁾。

3.1 「社会民主党宣言書」について

「社会民主党宣言書」が載った『労働世界』第79号は¹⁹⁾、1901年5月22日官報第5363号により発売頒布停止処分となっている。これは、社会民主党結成から4日後、「社会民主党宣言書」掲載から2日後のことであった。この宣言書では8つの理想綱領を掲げ、それら理想を実現する為に28の行動綱領を定め、实际的運動を試みることを宣言している。早稲田大学の安部磯雄研究をまとめた高野善一は「社会民主党宣言書」について、「それに先駆する西欧各国社会民主党綱領のどれにも劣らない（エルフルト綱領もゴータ綱領も共産党宣言もみな含めても）、日本独自にしてかつては世界的にも先駆的要素を含む（第一条に「人種平等」の宣言などを含む）、実に堂々として高遠の理想と卑近の現実問題への対決姿勢とを兼ねそなえた、この上ない日本社会運動の一金字塔」と絶賛する²⁰⁾。高野が挙げた「人種平等」の宣言などが日本独自で先駆的であるならば、当時類を見なかった安部の思想の背景に同志社の教育との相違や、その反映のあり様を確認することは有意なものと考ええる。

3.2 社会民主党の掲げる理想綱領とラーネットの経済学・政治学講義

本小節では、「社会民主党宣言書」の理想綱領8項目を挙げ、各項に関連があると考えられるラーネットの講義内容を『経済新論：附・政治学』より抜粋し、項目ごとに考察をおこなう。表示は以下の形式とする。

(番号)…「社会民主党宣言書」の掲げる理想綱領。括弧内の番号は実際の記載順を示す。

→ …『経済新論：附・政治学』からの抜粋。

⇒ …各理想綱領への考察。

(1) 人種の差別政治の異同に拘はらず、人類は皆同胞なりとの主義を拡張すること

→経済學ハ博愛ノ主義ニ背反スルモノナリトノ評説ヲ唱フルノ徒アリト雖モ是未ダ深ク經濟ノ本旨ヲ味ハザル者ノ言ナリ（14-15 頁）

→今十分ナル改良法ヲ得ニハ正當ナル經濟學ト眞實ナル博愛主義ニ由ラザルベカラズ而メ是等ハ唯眞正ナル基督教ニアルノミ（643 頁）

⇒理想綱領の第1に掲げられた本項は、人種や政治の異同に左右されない、全人類同胞主義、すなわち博愛主義の拡張を謳ったものと考えられる。安部の言う同胞主義とは、第2節に挙げたハートフォード神学校卒業演説の内容を説明した言葉でも「基督教の人類同胞主義」と明示されていることから²¹⁾、キリスト教信仰のもつ同

胞主義と読むことが出来る。人類同胞主義は、平等主義や隣人愛などの言葉で表すこともできる考えであり、本項ではその対象がすべての人類と設定されていることから、博愛主義を指すものと解釈する。安部にとっての博愛主義が社会主義思想と繋がっていることは、自身が社会主義者となった原因を「明治維新の改革により私が比較的安楽なる生活から急轉直下貧乏生活に墜落したこと」と「京都同志社在學中基督教的博愛主義の感化を受けたこと」としたことからも明白である²²⁾。原因の2点目において、明確に、キリスト教の博愛主義と示しており、本項の博愛主義もキリスト教に基づいたものと結論付ける。安部が、政党の理想という現実と、博愛主義という精神の領域を結びつけて述べる姿勢は、ラーネットの講義の、経済とキリスト教信仰の並立を述べたことと完全に重なるものである²³⁾。

(2) 万国の平和を来す為には先づ軍備を全廢すること

- 各國ノ互市ヲ奨励スル并ハ必ズ平和ノ交誼ヲ保持スルヲ得ベキ也 (18 頁)
- 治安ト文化ヲ増進スルヲ²⁴⁾ハ外國貿易ヨリ生ズル所ノ結果ナリ (一) 戦争ノ大ニ貿易上ニ妨害ヲ及ホスヲ以テ貿易ノ隆盛ナル國ニ於テハ成ベク治安ヲ保持セント欲スルノ志望アリ又貿易ノタメニ各國ノ人民互ニ相交通スルヲ以テ益々親愛ノ情ヲ増シ嫌忌ノ念ヲ減²⁵⁾殺スルニ至ルベシ (335 頁)
- 基督教ノ精神漸々全世界ニ遍ネク陸海メ警備ヲ必要トセザルノ時機ニ達セバ (政治学 29 頁)

⇒第2項では、安部が、先ず自らが軍備を手放すことを理想とするのに対し、ラーネットは、キリスト教の精神が世界に行き渡ったならば軍備を放棄することが出来ると述べている。これは一見すると、安部が非戦論、ラーネットが正戦論を述べているようにも受けとめられる。しかし、安部は本項に関する説明の中で、「絶対的に戦争を非認するものにあらず」と前置きした上で、絶対的な非暴力主義²⁶⁾により、虚無党、無政府党、軍隊制度などの様な「白刃と爆裂弾」の助けを借りるような愚は犯さないと述べていることから²⁷⁾、ラーネットと同じく正戦論者であったと考える²⁸⁾。後にも触れるが、ラーネットはあらゆる事柄に対し緩やかな変革を促す傾向があり、軍備についても同様の姿勢であったことが明らかである。対して安部は軍備撤廃に関する主張について、「吾人の説は頗る急激なり」と自認している²⁹⁾。ここに表れた両者の焦燥感の違いは、戦争までの時間的距離、時代背景に起因するものと推察する。

(3) 階級制度を全廃すること

→幾許カノ便益アリト雖モ全軀ヨリ論スル并ハ農夫自ラ土地ヲ所有スルヲハ數人ニ全土ノ過半ヲ領セシムルコトニ比スレバ遙ニ優ル所アリ（政治学 56 頁）

→貴族ナキノ國柄ニ於テ更ニ貴族ヲ設クルノ必要ナシト雖モ貴族ノ存スル地ニ於テハ其儘ニ存置スルヲ良策トス（政治学 56 頁）

→其國ノ事情ニ關スルモノナリ（政治学 56 頁）

⇒安部がここで示した階級制度とは、貴族と平民という称号を指している。人が生まれながらに貴賤貧富の差別を受ける理はないとし、人為的に作られた貴族制度および貴族院の廃止を訴えたものである³⁰⁾。この理想は第1項の同胞主義、平等主義と根を同じくしたものであり、キリスト教信仰を基とした主張である。また、安部は、階級制度の崩壊により貧困生活を送らざるを得なかった経験を持つ。明治政府による士族階級の取り上げであったが、この時、上位士族は爵位を与えられ貴族階級となったことも、「大に此貴族主義を排撃せざるべからざるを信ず」という痛烈な主張につながったものと言えよう³¹⁾。対してラーネッドは、少人数により国土の大部分を所領することや、上位なる者として位置付けられることを問題視しながらも、すでに貴族制度が存在する国では世襲貴族などによって政治の一部が組織されていることから、制度維持が良策であると講義している。これは、制度としての貴族を持たないアメリカで生まれ育ったこと、自身が上流階級の出身であることによる想像力の欠如と、前項でも指摘した、緩やかな変革を良しとする姿勢に由来するものと考えられる。

(4) 生産機関として必要なる土地及び資本を悉く公有とすること

→生産ノ三必要物ハ天然物、勤勞、財本、也（28 頁）

→天然物ノ中ニハ土地鑛山海水風力蒸氣力水力等ニシテ是レモトヨリ人類ニ賦與セラレタル上帝ノ賜ナリ（28 頁）

→假令土地ノ私有權ヲ停止スルモ決メ勤勞者ニ益スル所ナカルベシ（611 頁）

⇒本項は、土地と資本がなければ労働によって財産を生むことはできないという考えに基づいている。安部が後に土地の公有化についてまとめた論説によれば、H. ジョージ、J. S. ミル、H. スペンサーらを論拠とし、土地と資産を公有化（国有、公有のどちらでも可）することにより、土地の私有権を得る機会を持たなかった者たちへの機会平等を目指していた³²⁾。私有権に関する主張は安部とラーネッドで異なっており、土地は天然物であり人間の所有物ではないという考えは同じであるが、ラーネッドは、それら

を国が所有する事の現実的な危険性を指摘している。ラーネットの危機意識は、自身の叔父であり、著名な政治学者、イエール大学第九代学長の T. D. ウルズィの『政治学』（1877 年）に依っている。ウルズィは国家の領域について「[一般的社会福祉 (general welfare)]」の視点から、一定の社会介入の必要性は認めるものの、「権利」の視点において国家の権限領域を限定し、政府による個人権の侵害を「非道德的悪政 (immoral misgovernment)」³³⁾とする。安部は、このような国家の権限領域に対する危機意識は、宣言書において持っていなかったものと考えられる。しかし住谷によれば、安部が土地の公有化主張の論拠のひとつとした H. ジョージの *Progress and Poverty* (1879 年) の講義はラーネットから受けたとされており³⁴⁾、どのような講義がおこなわれたか現時点では詳細が明らかでない為、今後さらなる調査をおこない、両者の相違の理由について考察する予定である。

(5) 鉄道、船舶、運河、橋梁の如き交通機関は悉くこれを公有とすること

→政府ノ干渉ハ自由ト併立スベキモノニアラズ (706 頁)

→政府ハ全國ノ鉄道ヲ所有スベキモノナル乎又鉄道會社ニ託シテ其大軀ニ付キ管理スベキモノナル乎蓋シ容易ニ判断スル能ハス (739 頁)

⇒本項も前項と同じ論理による、安部とラーネットの相違が表れている。安部は、交通機関も間接的に生産に必要なものとして、土地と同じく「天然物」と考え、これを一部の資産家たちの手から取り戻し、国家を通して、万人に利益を分配出来るものと信じていた³⁵⁾。対してラーネットは、経済活動の基盤を成す事業に国が介入することは国民の自由や自立を脅かすだけでなく、国民に還元されるはずの利益が国のものとなる可能性を懸念している。自由や自立を重要視するラーネットの講義内容にはキリスト教の会衆主義信仰が表れており、初期同志社の社会科学教育と神学教育の接点の表出と捉えることができる。

(6) 財富の分配を公平にすること

→力役者ヲシテ十分ノ食料ヲ得セシムルニ足ルノ給銀ヲ支給スルハ雇主ノ利益タルヤ復タ疑フベカラズ (43-44 頁)

→職人ノ情況ヲ改良スル上ニ付テ最効力ヲ有スベキ良法ハ職人ノ營業同盟ト雇主ト被雇者ノ間ニ利益ヲ分配スルコトナリ (643 頁)

⇒本項への安部の解説によれば、「一国の全財産を全人口に平分」するものではな

く³⁶⁾、土地、資本、交通機関という経済活動を生み出す基盤となるものは国民全員の財産とし、それを基に生み出された財産は、各人の能力や働きに応じて正当に分配されるべきとしている。これは、正当な分配の前段階として、資産家と労働者の自由競争のスタート地点を揃えようとしたものであった。労働に対する正当な評価と対価の支払いを促す点において、安部とラーネットの言論は同じものと言えよう。

(7) 人民をして平等に政権を得せしむること

→各人政事上ニ參與スベキ天賦ノ權理ヲ有スルニアラズ政体ノ論ハ權理ノ問題ニアラズ寧ろ實驗上ニ基キ良否ヲ決定スベキモノナリト信ズル也（政治学 25 頁）

→權理ニモ亦タ制限ノ存スルコトハ理ノ尤モ容易キモノナリ（政治学 26 頁）

⇒安部は本項について、「然れども教育なき人民に選挙権を与ふことは多少の危険なきにあらず（中略）選挙権を与ふ途を講ずると共に彼等に適當の教育と訓練を与ふるは刻下の急務なり」と述べており³⁷⁾、選挙権や参政権は平等に与えられるべきものとする理想には、国家運営に係る事案について、雇用関係などに左右されることなく判断出来るだけの教育を受けることが前提条件として置かれていることが明らかである。ラーネットの講義では、万人が政治に参画する権利を元来持っているわけではないとし、安部と同じく、政治に関する判断能力の取得という前提条件があることを指摘している。ここで注視すべきは、参政権を持つための条件として、両者ともに教育の必要性を示していることであろう。

(8) 人民をして平等に教育を受けしむる為に、国家は全く教育の費用を負担すべきこと

→力役者ノ巧拙ハ其智力ニ關ス（一）智力ヲ有スル者ハ其業務上最良法ヲ習得スルニ敏捷ナリ（二）數名ノ監視者ナシト雖モ己レ其業務ヲ怠ラザルナリ（三）物貨ヲ製スルニ實質ヲ費ヤスヲ少シ（四）精良ナル器械ヲ使用スルヲニ巧妙ナリ故ニ普通教育ヲ一般ニ布及スルハ國家富榮ノ基本タリ（44 頁）

→職工ノ体裁ヲ改良スルニハ普通ノ教育ヲ為スニ在リ（556 頁）

→全國ノ兒童ヲシテ教育ノ初歩ヲ學バシムルタメニ小學校ヲ設置スル如キハ政府ノ義務タルヤ言ヲ俟タズト雖モ高等ノ教育ニ至テハ其國ノ民情風俗ニ關スルモノ少ナカラザルガ故ニ同ジク政府ニ於テ干涉スベキノモノナルヤニ至テハ疑ナキ能ハズ（724-725 頁）

→授業料ノ事ニ付テハ各國其趣ヲ異ニシ或ハ全ク授業料ヲ免除スルアリ（727 頁）

⇒安部は本項の解説の中で、「団結は労働者の生命にして、彼等の為には唯一の武器なり、彼等はこれに依りて自治の精神を養ふのみならず、幾多の教育と訓練を受くるべし」³⁸⁾と述べ、政府に対し、人口の大部分を占める労働者や小作人への教育と、彼らが自由に団結する権利を認める法整備を求めている。また、「義務教育の年限を少くとも満二十歳までとなし、全く公費を以て学齢の青年を教育する」ことが理想と断言しつつ、現行では非常に困難なため、「高等小学卒業までを以て義務教育年限となし、無月謝制度を取り、且つ公費を以て教科書を与ふる」ことを掲げている³⁹⁾。本項の理想や解説は、義務教育の年限や教育の完全無償化など、細部にいたるまでラーネットの講義内容と重なることが明らかである。

3.3 小括

社会民主党は結成から2日後に解散命令を受けた為、実際の政党活動開始に行き着くことは出来なかった。しかし「社会民主党宣言書」に謳われる理想論は、キリスト教の博愛精神に拠って立つことをうかがわせ、かつ、遠大な理想に向かって実際に行動していくという意気込みが表れている。前小節で比較したとおり、安部の起草した理想やその解説には、ラーネットの経済学講義と呼応する点が多いことが明らかである。その中でも、キリスト教の博愛主義が根幹を成していることは「社会民主党宣言書」冒頭においても表れており、安部は、社会民主党の性質について「貧民を庇して富者を敵とするが如き狭量のものにあらず」⁴⁰⁾と宣言する。この姿勢もまた、「法律ヲ制定スルコトハ必要ナリト雖モ富人ヲ駆除スルコトヲ以テ貧人ニ益スルト云フニ至テハ實ニ誤謬ノ甚ダシキモノト謂フベキナリ」という、ラーネットの講義内容を色濃く映し出している⁴¹⁾。このようなラーネットの経済学と政治学の講義について住谷は、「明治十二、三年代にいち早くも資本主義に必然的に纏綿する弊害に着目し、これと経済学とを関連せしめて論じたるが如き、博士がさすがに矛盾を孕みつつある資本主義社会に生長した外人（ママ）であるからではあろうが、その慧眼は驚異に値するもの」⁴²⁾とした。また、明治十年代までの日本国内における経済学・政治学に関する論考と著書を調査し、そこに社会主義に関する言及がないことを示した上で⁴³⁾、「社会問題一般、共產主義、社会主義、無政府主義、虚無主義等を重大視し、経済学と関連せしめ之が解説、批判等を斯くまで詳細懇切を極めて為したものは全く他にその類を見ざるところ」⁴⁴⁾と評している。

しかし、安部とラーネットで大きく異なる点も存在する。それは、貧しい者に対するまなざしである。実際の社会において等しく救済されるべきであるという基本は同じで

あるが、ラーネッドは、「世界万般ノ害惡中一ニ經濟學ノミヲ以テ救治シ能ハザルモノアリ何ントナレバ凡ソ各業務中甚ダ好シカラザルモノアリ又身体腦力ノ虚弱ナルモノアリ又自己ノ不注意怠惰ナルヨリシテ貧苦ノ中ニ沈淪スルモノアリ故ニ此ノ如キノ禍害ハ多クハ自カラナセル禍ヒナルヲ以テ宗教道德ノ力ニ頼ラザレバ決メ矯正スル能ハザルナリ」と述べ⁴⁵⁾、貧困の原因の多くは自己にあると見ている。このような主張の背景には、ひとりひとりの自立を重んじるラーネッドの信念がある。ラーネッドは、就学困難な家庭環境の学生を金銭的に支える際、「依存心をおこさないように配慮しながら援助」していた⁴⁶⁾。対して安部は、貧困の多くは権力を有する者たちにより不当に与えられたものと考えている⁴⁷⁾。自立心だけでは克服できない困窮が存在することを、実体験として知っていたからである。父方母方ともに名家と称されるアメリカの上流家庭に生まれ育ったラーネッドに困窮経験がなかったことが、このような両者の違いを生んだ一因と言えよう。

4 キリスト教社会主義

本節ではキリスト教主義教育の基盤である神学教育に焦点を当て、初期同志社の学際的教育の特徴を、前節の社会科学教育とは異なる視点から明らかにすることを試みる。

現在の同志社のキリスト教主義教育は、理念として継承されているが、神学とその他の分野を学際的に学ぶ学生は非常に少ないという実態がある。しかし、本稿で考察対象とした安部の在学時には、すべての学生が神学と社会科学・自然科学を並行して学んでおり、名実ともにキリスト教主義教育かつ学際的高等教育を受けていた。このことは、初期同志社と同時代の、他のキリスト教系学校と比較しても特異な事例である。多くのキリスト教系学校は海外の宣教団体や宣教師を母体とした、いわゆるミッションスクールであり、キリスト者養成・牧師養成が主たる目的であることから、教育は神学のみで構成されている。同志社とほぼ同じ時期に、プロテスタントの別教派が設立した学校として、長老派と改革派のミッションスクールの東京一致神学校（現在の明治学院）がある。東京一致神学校最初期の講義内容は「組織神学、教会史、新約釈義、基督伝、旧約歴史及び地理、説教学、旧約釈義」であり⁴⁸⁾、神学教育のみがおこなわれていたことが明らかである。

第3節において、富者は敵ではない、という安部とラーネッドがともに主張した思想を挙げた。この思想は、安部を、社会主義者ではなくキリスト教社会主義者として強烈

に特徴づける。これについて神学者の土肥昭夫は、そのように評される所以として、新約聖書の「コリントの信徒への手紙2」6章10節と「フィリピの信徒への手紙」4章12節の2つを挙げている⁴⁹⁾。そこで本節では、はじめに安部とラーネットのキリスト教観を概観し、次に、土肥が提示した2つの聖句と、安部に新約聖書解釈を講義したラーネットは各聖句についてどのような講義をおこなったか、また、そこに社会科学教育とのつながりがどのように表れているかについて確認する。最後に、2つの聖句中、よりラーネットの聖書解釈の特異性が顕著である「フィリピの信徒への手紙」4章12節に絞って、先に挙げたミッションスクールの東京一致神学校でおこなわれた聖書解釈との比較考察をおこなう。これにより、同志社の神学教育、学際的教育の特異性について明らかにする。

4.1 安部とラーネットのキリスト教観

明治期日本のキリスト者において、キリスト教信仰と社会主義思想の並立は多くの葛藤を生んだ。それらの多くは、どちらか一方もしくは両方を手放すことを選んだが、安部の場合は「キリスト教を人類愛、平等主義、同胞主義におきかえ、これを社会の構造のなかに実現しようとする」「自由主義的キリスト教理解」によって、キリスト教信仰と社会主義思想の並立が可能であった⁵⁰⁾。安部のキリスト教理解は、安部に洗礼を授けた新島襄と同じく、19世紀ニューイングランドのピューリタニズム色濃い会衆主義からはじまり、同志社を卒業する際には聖書解釈において逐語靈感説から距離を取り、最終的に「学校や寺院や教會に於て修養すること」は「一種の型であつて、結局形式に止まるもの」とし、「人類愛といふ三文字にて充分である」と変化した⁵¹⁾。安部にとっての最終的なキリスト教理解は、「己れを愛する如く人を愛せよ」⁵²⁾の一点に絞られることとなった。対して、会衆派を中心とした海外伝道団体アメリカン・ボード創設者の祖父と⁵³⁾、組合教会牧師の父を持つラーネットのキリスト教理解は⁵⁴⁾、終始、会衆主義であったと言える。「個人が神のみもとに近づく自由、キリスト教社会の組織の自由、思想の自由」の三つを「理想と原理」として掲げ⁵⁵⁾、自由を重視するラーネットの姿勢は、リベラルな傾向を持つ会衆主義と一致する。さらにラーネットは、20世紀においては「社会的・国際的な問題へのキリスト教の適用」と「自由と協同のいっそう完全な結合」の必要性を展望しており⁵⁶⁾、現実社会とキリスト教信仰との融和を求めたことが明らかである。このようなキリスト教理解を念頭に置きながら、次節にてラーネットの聖書注釈を確認する。

4.2 ラーネットの聖書解釈

土肥が指摘した、安部をキリスト教社会主義者と評する所以の聖句と、それに対するラーネットの聖書解釈、および筆者の考察を、以下の形式で述べる。

■ … 聖句。

→ … ラーネットの聖書解釈の抜粋。

⇒ … 各聖句およびラーネットの解釈に対する考察。

■「コリントの信徒への手紙2」6章10節 新共同訳

悲しんでいるようで、常に喜び、貧しいようで、多くの人を富ませ、無一物のよう
で、すべてのものを所有しています。

→ ラール子デ講述・楠瀬一貫筆記『哥林多後書註釈』福音社、1890年、123頁。

パウロハ貧くして一物も身尔帶る所なし、然れども靈魂上の財寶ハ裕カル餘りあり
て、多の心貧き者を富したり

⇒ この聖句に対するラーネットの聖書解釈は、当時や現代の聖書解釈と比べても特異な点は見受けられない。しかし、この解釈を、先に述べてきた経済学や政治学の講義と同時期に聞いたのであるならば、現実社会の貧困と精神の貧困が決してイコールではないと想像することは、容易であったと思われる。安部が、宗教と経済を社会改良策の両輪に据えるまでの一過程を、ラーネットの聖書解釈に見ることができる。

■「フィリピの信徒への手紙」4章12節 新共同訳

貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であつても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。

→ ラール子デ講述・楠瀬一貫筆記『腓立比書・哥羅西書註釈』福音社、1890年、191頁。

パウロハ誹謗貧窮の間尔處し、泰然として痛める容なく、また富貴を得るとあるも少も奢侈尔流れ傲り高ぶることなく、よくその富を神のため尔使用ふとなり、或人ハ富貴者の誘惑ハ貧者の試惑より耐易しと云、然れどもその實決して然らず、貧窮なるときハ心専一尔して道尔従ひ易けれど富を得るときハ自然傲慢虚誇の念を起し、愈々益々増長して金錢の爲尔其心を役する尔至る、巨額の金を適宜有用尔使用するハ隨分六ヶ敷事なるなり

⇒本聖句に対するラーネットの解釈の視線は、聖句の主人公パウロではなく聖書読者へ向けられていることが特徴的である。「明治期から昭和初期における日本最高の新約注解者」⁵⁷⁾と称されるラーネットに対し、同時代のその他の注釈書では、パウロ自身が貧富を超越していることへの賛美が記されており、視線はパウロを向いている⁵⁸⁾。また、明らかに、聖句の厳密な解釈にとどまらず、後半部分には経済学の内容が付け加えられている。これが明らかにラーネットの特異性であることを示すため、ラーネットと同じく宣教師であり、東京一致神学校で新約聖書釈義を担当した W. インプリー⁵⁹⁾による注釈と比較をおこないたい。以下長文となるが、インプリーの解釈を引用する。

ウィリアム・イムプリー著、井深梶之助訳『ピリピ書註解』日本基督教興文協會、1925年、153-154頁。

窮乏も彼を屈せず、富有も彼を倨慢ならしめなかつた。ギリシヤ人の宗教には、普通の人には知らせない秘儀秘訣といふものがあつた。此に秘訣を得たりとあるは、即ちそれらの秘儀秘訣を傳授する時に用ひられた言である。パウロはピリピ人に告げて、我は既に知足の秘訣を傳授せられたと言ふたのである。然らばその秘訣は何ぞとなれば、次節に言ふ所が即ちそれである。(中略) そは我よわき時に強ければなり(中略) パウロが體驗した所の秘訣を學んだ者は、晴雨を論ぜず中天に高く飛上りて聲を限りに囀る雲雀の如き者である

上記のインプリーの解釈は聖句に忠実に解釈がおこなわれており、パウロ賛美の傾向も顕著である。ラーネットの解釈と比較した際、別の聖句に対する解釈なのではないかと感じさせるほど異なっている。このような違いが生じる理由は、ラーネットとインプリーの神学の違いだけでなく、講義をおこなう環境の違いも影響したと考える。すなわち、神学のみを教授するミッションスクールと、学際的教育をおこなう総合高等教育機関の違いである。

4.3 小括

ラーネットの聖書解釈は、聖書の言葉を現実世界に引き付けて解釈されていることが明らかであり、同時代において他に類を見ない特異性をもつ。まさに「右手に聖書、左手に経済学」の人であり、このようなラーネットから神学と社会科学、両方の教育を受けた同志社の学生の多くが、キリスト教信仰の上に社会活動を展開していくこととなっ

たのは当然の帰結と考えられる。

本節で手掛かりとした土肥の論文では、安部磯雄「社会主義と基督教」(1906年)⁶⁰⁾の記述に基づき、先述の2つの聖句を挙げている。しかし、実際の安部の論考に聖書箇所は明確に記されておらず、「故に基督の弟子ポーロの如きは(中略)、亦貧しき人にも富める人にも負へる所ありと言ふて居る」⁶¹⁾という記述のみである。現時点において、土肥の挙げた聖句が、安部が思い浮かべた箇所と完全に一致するか否かを断定することは出来ないが、ラーネットの注釈書を確認する限り、大きく外れていないことは明らかである。特に「フィリピの信徒への手紙」4章12節に対するラーネットの解釈、貧富に関係なく罪人であるという点が、安部の記述⁶²⁾と重なっていること、インブリーの解釈には記されていないことから、ラーネットの神学教育の特色と影響を明確に見ることが出来よう。

5 ま と め

本稿は、キリスト教主義教育を掲げる同志社において、創立当初から学際的教育がおこなわれてきたことの特異性や、学生に与えた影響について明らかにすることを目的とし、神学教育と社会科学教育の例を取り上げて考察をおこなってきた。その結果、初期同志社には19世紀アメリカの会衆主義、および自由主義神学への傾向を強めていた高等教育機関の様相が顕著に表れており、よりリベラルな神学、信仰を受容する土壤が育まれていたものと考えられる。このことは、ラーネットの社会科学教育と神学教育の相互に結びついた講義内容にも明らかであり、安部に限らず、日本の社会福祉の草分けの多くが同志社出身者、会衆派の組合教会員たちであったことから示されている。また、安部のキリスト教社会主義とは、今日考えられる民主主義と多くの類似点を持つことが「社会民主党宣言書」に明らかであり、キリスト教信仰との融合が比較的容易であったものと言える⁶³⁾。これはそのまま、ラーネットと初期同志社の教育の特異性を示している。牧師養成を目的とするミッションスクールではなく、神学にとどまらない、社会科学や自然科学も含めた学際的キリスト教主義教育を行った同志社であったからこそ、多角的で柔軟な視野や思想形成の可能性が高まり、キリスト教の博愛主義を基盤とした社会の改良や改革を模索する人物を数多く輩出したものと考えられる。

注

- 1) 社会民主党の成立と解散について、結成即日活動禁止とする説を用いるものが多いが、本稿では「1901年5月18日結成および届出、5月20日禁止」の説を取る。太田雅夫「社会民主党の結成と禁止－史的考察を中心として－」『社会科学』第11号、同志社大学人文科学研究所、1970年、161-227頁。
- 2) 1901年5月20日『労働世界』第79号に掲載されたが、官報第5363号により発禁処分を受けている。本稿では、高野善一編著『日本社会主義の父 安部磯雄』『安部磯雄』刊行会、1970年、241-248頁。に採録された（原文のまま）ものを用いる。
- 3) 住谷悦治『ラーネッド博士伝－人と思想』未来社、1973年。
- 4) 社会福祉学者の住谷馨は、同志社のキリスト教社会主義について、「富・権力に志向せず、社会問題に志向し、社会改善・改良の実践家として牧会からの救済活動、社会主義、社会事業の実践活動に献身する」ものとする。住谷馨「キリスト教社会主義と社会事業」『同志社百年史 通史編一』同志社、1979年、477-478頁。
- 5) 安部磯雄「吉野博士と無産運動」『青年と理想』岡倉書房、1936年、152-154頁。
- 6) 安部磯雄『社会主義者となるまで－安部磯雄自叙伝』改造社、1932年、102頁。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 同上、211頁。
- 10) 同上、210頁。
- 11) 1930年、第二回普通選挙に際しての「安部磯雄立候補宣言」より。高野前掲書、249-250頁。
- 12) 竹中正夫「D・W・ラーネッド」『同志社時報』第76号、1984年、105頁。
- 13) 住谷悦治前掲書、282頁。
- 14) 同上、199-201頁。
- 15) 安部前掲書『社会主義者となるまで』、102頁。
- 16) 住谷悦治前掲書、222-226頁。
- 17) ラルネット著・宮川経輝訳・土居通予編『経済新論：附・政治学』任天書屋、1887年。
- 18) 坂本は、住谷悦治の聞き取りに対してラーネッド自身が日記から抜粋したメモを基に、安部の受けた講義の緻密な推測を行っている。「安部磯雄がラーネッド博士から受けた経済学は「経済新論」の英文原稿であったと考えてほぼ差支えないであろう」とし、本稿の推測と同じ結論であった。坂本武人「安部磯雄研究（1）」『同志社女子大学学術研究年報』第15号、1964年、374頁。
- 19) 労働新聞社『労働世界』東京、1901年。
- 20) 高野前掲書、77頁。
- 21) 安部前掲書『社会主義者となるまで』、210頁。
- 22) 同上、1頁。
- 23) ラーネッドの講義では博愛という言葉が度々登場するが、これと同義として宗教、仁

愛、道義などの言葉も用いられている。

- 24) 片仮名の「コ」と「ト」の合字。「コト」と読む。
- 25) 文字が潰れているため判読が難しい。「減」の可能性もある。
- 26) 安部の非暴力主義は日露戦争（1904-1905 年）下でも貫かれており、非暴力主義者として世界的に著名なレフ・ニコラエヴィチ・トルストイとの間に、互いの思想や主義を称え合う往復書簡が残っている。
- 27) 高野前掲書，246-247 頁。
- 28) 安部の平和論に関する研究は、様々な分野において研究が行われていること、時代背景による安部の変化が予見されることから、本稿ではこれ以上の掘り下げを行わず、今後の課題としたい。
- 29) 高野前掲書，247 頁。
- 30) 同上，246 頁。
- 31) 同上。
- 32) 安部磯雄『土地公有論』クララ社，1929 年，8-9 頁。
- 33) 中谷義和『草創期のアメリカ政治学』ミネルヴァ書房，2002 年，45 頁。
- 34) 住谷悦治前掲書，75 頁。
- 35) 安部前掲書『青年と理想』，3-17 頁。
- 36) 高野前掲書，246 頁。
- 37) 同上，248 頁。
- 38) 同上，248 頁。
- 39) 同上，246 頁。
- 40) 同上，241 頁。
- 41) ラルネット前掲書，608 頁。
- 42) 住谷悦治前掲書，229 頁。
- 43) 同上，238-239 頁。
- 44) 同上，239 頁。
- 45) ラルネット前掲書，641 頁。
- 46) 竹中前掲書，107 頁。
- 47) 安部前掲書『青年と理想』，1936 年。
- 48) 明治学院編『明治学院百年史』，1977 年，69 頁。
- 49) 土肥昭夫「明治期におけるキリスト教と社会主義」『基督教研究』35 巻 2・3 号，1967 年，124 頁。
- 50) 同上。
- 51) 安部前掲書『青年と理想』，74-79 頁。
- 52) 同上，78 頁。
- 53) 竹中前掲書，103 頁。
- 54) 住谷悦治前掲書，7 頁。

- 55) 同上, 317-325 頁。
- 56) 同上。
- 57) 原口尚彰「日本新約聖書学史と D・W・ラーネット『新約聖書 共観福音書講解上下』」『基督教研究』第 61 巻, 第 1 号, 1999 年, 44 頁。
- 58) 原口が区切った「明治期から昭和初期」の聖書学者として, 山谷省吾 (1889-1982) や石原謙 (1882-1976) の注釈書を確認したが, インブリーと同様に, パウロ賛美と福音的弁証法の指摘が記されている。
- 59) William Imbrie (1845-1928 年), アメリカ合衆国長老教会の宣教師。40 年以上にわたり日本での宣教・教育活動に携わった。
- 60) 安部磯雄「社會主義と基督教」『新紀元』第 5 号, 1906 年, 1-5 頁。
- 61) 同上, 2 頁。
- 62) 注 61 の引用文を指す。
- 63) 神学者の土肥は, 「安部においてはキリスト教に根ざすこのようなヒューマンな心情が合法主義的, 民主主義的方法と結びついた」と述べる。土肥前掲書, 124 頁。また, 経済学者の坂本は「彼にとって, キリスト教も, 社会主義もすべて, この問題 (社会問題: 筆者補) を解決するための手段として用いられるべきであると考えている」と分析する。坂本前掲書, 384 頁。神学, 経済学という異なる分野の研究者が, 安部に対して類似した評価を行っていることに留意したい。

参考文献

- 安部磯雄 (1906) 「社會主義と基督教」『新紀元』第 5 号。
- 安部磯雄 (1929) 『土地公有論』クララ社。
- 安部磯雄 (1932) 『社會主義者となるまで－安部磯雄自叙伝』改造社。
- 安部磯雄 (1936) 『青年と理想』岡倉書房。
- A. E. マクグラス著・本多峰子訳 (2018) 『旧約新約聖書ガイド』教文館。
- 石原謙 (1978) 『石原謙著作集』第 2 巻, 岩波書店。
- 出原政雄 (2007) 「平和思想の暗転: 十五年戦争期の安部磯雄」『同志社法學』59 巻, 2 号。
- 太田雅夫 (1970) 「社会民主党の結成と禁止－史的考察を中心として－」『社会科学』第 11 号。
- 岡部一興 (2021) 「明治前期における合同運動の一考察－日本基督公会運動から日本基督一致教会, 組合教会との合同運動－」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』53 巻, pp.29-70。
- 坂本武人 (1964) 「安部磯雄研究 (1)」『同志社女子大學學術研究年報』第 15 号, pp.362-385。
- 住谷悦治 (1973) 『ラーネット博士伝－人と思想』未来社。
- 住谷磐 (1979) 「キリスト教社会主義と社会事業」同志社社史史料編集所編 (1979) 『同志社百年史 通史編一』同志社, pp.477-509, 所収。

- 高野善一編著（1970）『日本社会主義の父 安部磯雄』『安部磯雄』刊行会。
- 竹中正夫（1984）「D・W・ラーネット」『同志社時報』第76号，pp.102-108。
- 田中秀臣（2001）『沈黙と抵抗』藤原書店。
- 田中真人（2003）「初期社会主義における〈経済〉と〈政治〉」『キリスト教社会問題研究』第52号，pp.183-199。
- 辻野功（1979）「キリスト教社会主義者安部磯雄」『文学』第47巻，pp.141-147。
- 土肥昭夫（1967）「明治期におけるキリスト教と社会主義」『基督教研究』第35巻2・3号，pp.120-145。
- 中谷義和（2002）『草創期のアメリカ政治学』ミネルヴァ書房。
- 西岡優美・西岡幹雄（2023）「ラーネットの経済思想の形成と展開－初期同志社と近代日本の経済学－」『新嶋研究』第114号，pp.72-92。
- 日本基督教団出版局編（1985）『説教者のための聖書講解』日本基督教団出版局。
- 日本基督教団出版局編（1988）『説教者のための聖書講解』日本基督教団出版局。
- 原口尚彰（1999）「日本新約聖書学史とD・W・ラーネット『新約聖書 共観福音書講解上下』」『基督教研究』第61巻，第1号，pp.43-54。
- 深田未来生（1978）「社会的福音における敬虔：ラウシェンブッシュの祈りを中心に」『基督教研究』第41巻，第2号，pp.187-202。
- 明治学院編（1977）『明治学院百年史』明治学院。
- 山谷省吾（1921）『パウロのギリシヤ書』警醒社書店。
- 山谷省吾（1933）『新約聖書・新譯と解釋Ⅰ（8）』長崎書店。
- 山谷省吾（1962）『コリント人への第二の手紙』新教出版社。
- ラルネット著・宮川経輝訳・土居通予編（1887）『経済新論：附・政治学』任天書屋。

（第21期第1研究会による成果）